

市政研究所だより No. 17

豊中市政研究所 TIMR (The Toyonaka Institute for Municipal Research)
〒561-0802 大阪府豊中市曽根東町3-7-1
TEL:06(6862)2290 FAX:06(6862)2292
ホームページ: <http://www.tctt.zaq.ne.jp/timr> E-mail: timr@tctt.zaq.ne.jp



MENU

シンポジウム開催の報告	... 1
研究員レポート	... 2~5
ツールボックス	... 5
データバンク通信より	... 6
事務局から	... 6

シンポジウム「IT革命のゆくえ」を開きました

前号市政研究所だより No.16 でもご案内したとおり、1月29日(火)、午後2時から、豊中駅前のとよなか男女共同参画推進センター・すてっぷホールで、シンポジウム「IT革命のゆくえ-IT(情報技術)を私たちの生活や地域活動にどう生かすか」を財団法人 とよなか男女共同参画推進財団との共催で開催しました。当日は104名の市民や市職員が集まりほぼ満員となりました。以下内容の概要を報告します。

【5人のパネラーが様々な角度から報告】

シンポジウムの前半は、まず「IT革命の光と影」をテーマに途中ビデオも加えながら NTT ドコモ関西ソリューション営業部の坂本幸夫さんから、ITの

発展経緯やこれからのIT社会のイメージ、経済に及ぼす効率化や女性の



社会進出といったメリットとプライバシー問題や対人コミュニケーション不足といったデメリット等について講演をいただきました。その後、「HPづくりと福祉ボランティア活動」と題して豊中市社会福祉協議会の勝部麗子さんが、HP(ホームページ)づくりのきっかけやHPづくりを通しての学生やボランティアグループとの出会い、ITを使った情報から取り残される人の問題等について報告。続けて「商業活動と地域サイトづくり」について豊中駅前まちづくり会社の小林和久さんから、豊中駅前発の新しい地域情報サイトづくりへの取り組みの経緯やITを使った

今後の商店街の戦略等についての報告がありました。次に「とよなか生まれ IT 育ち・日常からの発信」と題して、エンパワーメントグループコラボの澤田美佐さんが、豊中の婦人会館の講座で出会いがもてできたコラボがHPを使って情報発信するに至った経過や、子育て情報等のコンテンツを通してどんなメッセージを送りたいのか等を報告。最後に「シニアの居場所としてのITネット」と題してシニアネットの加福共之さんから、ITによる地域社会のネットワークの形成の可能性や自らが所属しているシニアを中心としたネットコミュニティの特徴的な活動について報告していただきました。シンポジウムの進行役には市政研究所専門委員の櫻井あかねさんがあたりました。

【会場からの質疑応答や終了後には交流会】

また、シンポジウムの後半は、会場から各パネラーに質問があり、その一部に対してそれぞれが意見を述べました。また、シンポジウムの終了後にパネラーと参加者の交流会



を持ち約20名の方が参加された感想や意見交換をしました。

なおパネラーの報告の詳しい内容などについては、豊中市政研究所のHPや4月に発行予定の機関誌をご覧ください。

千里ニュータウン共同研究の経過

今回は2月20日(水)市政研究所で開かれた第3回研究会の内容を報告します。

第3回研究会では千里ニュータウンの再生の基本的方向と主要な施策について検討を行いました。まず、千里ニュータウンの抱える少子高齢化、集合住宅の機能劣化などの主要な問題点と、高水準のインフラ、緑資源など地域固有の資産、まちづくりに関する意識及び参加意欲の高い住民などのポテンシャルを踏まえ、千里ニュータウン再生の基本目標と4つの重点的な取り組みテーマ(案)を次のように提起しました。

【基本目標】

千里ニュータウン地域固有の資産を保全・継承しつつ、多様な住宅供給と円滑な住み替えの推進を通じて居住人口のバランスを改善し、さらに身近な生活支援施設の充実によって、幅広い世代が生き生きと暮らせる活力あるニュータウンを形成する。

【重点的な取り組みテーマ(案)】

多様な住宅供給と地域内住み替えの促進
住みつづけるために
身近な生活支援機能の充実
暮らしを豊かにするために
豊かな地域資産を保全・管理する仕組みの導入
まちの資産を受け継ぎいつまでも誇れるまちに
ニュータウン管理組織の設立

まちの自立的成長のために

また、「重点的な取り組みテーマごとの課題と主要施策」、その「取り組み方針と検討課題」についても検討しました。

主要な問題点とポテンシャルについては、「問題点よりポテンシャルを強調したほうがよい」、「ここでいうまちづくりに関する意識というものは、従来型ではなく、新しいまちづくり意識の芽生えということではないか」などの意見がありました。再生の基本目標と4つの重点的な取り組みテーマ(案)については、「千里ニュータウン固有の文化創造の必要」、「住宅のデザインも日本らしい和をコンセプトにしたものをとりいれてはどうか」、「中古住宅の流通を盛んにするためには物件の評価は環境も含めてきちっと評価されなければいけない」、「今の近隣住区の単位は大きいので区分して施設配置を考えてはどうか」、「自分たちが必要なもの、住んでいる人が本当に必要なものをつくっていくことができるように」、「地域の情報が集約できる、一元化できる場所、しくみづくりがいる」、「インターネットでの情報交流だけでなく生身の交流ができる場を」などさまざまな意見が出されました。これらの意見を参考に各課題ごとの解決へ向けての方策の検討、報告書の作成に取り組んでいます。(太原)

機関誌「TOYONAKA ビジョン 22」第5号

特集：ニュータウン解体新書 間もなく発行です。(執筆者の敬称略、肩書きは平成14年3月末現在)

<特集論文>

千里ニュータウン - 回顧と展望
...大阪大学名誉教授 大久保 昌一
千里丘陵、類いまれな可能性
- プランナーの視点を追う
...大阪市立大学教授 土井 幸平
現代社会の矛盾の象徴としての郊外ニュータウン
...マーケティングプランナー 三浦 展
ニュータウンのジェンダー変容
...京都文教大学教授 西川 祐子
住民が演出するニュータウンの黄昏
...三重短期大学講師 柏原 誠

<トピックス>

新千里東町社会実験「ひがしまち街角広場」
...関係者による座談会の記録

多摩ニュータウンの地域通貨“COMO”
...COMO倶楽部 岡崎 昌史

<千里ニュータウン関連年表>

<シンポジウム記録>

IT革命のゆくえ
ITを私達の生活や地域活動にどう活かすか

<エッセイ> ~豊中に想う~

楽しんだ「豊中市子ども議会」
...株自然エネルギー・コム取締役 山藤 泰
“まちづくり”に生きて
~自治体職員としての思い出~

...豊中市政策推進部長 芦田 英機

市内高齢者の生活保護等についての意識は？ H13 自主研究経過その1

高齢低所得者に対する経済的支援策の現状と今後のあり方について

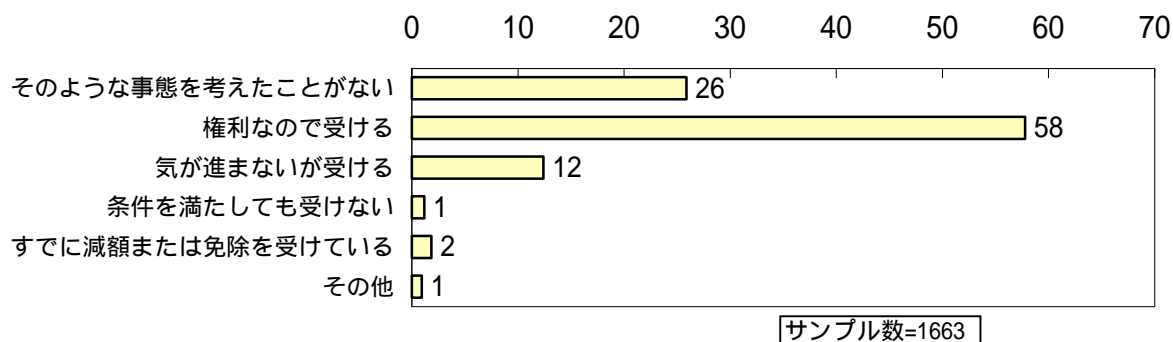
前号でも触れましたが、昨年12月に行なった「現在の暮らし向きと介護保険料、福祉制度などについてのアンケート調査」という長ったらしいタイトルの調査結果の一部について報告します。

調査の目的の一つとして、「対象者（満65歳以上の市民）が経済的に困ったとき、生活保護制度を利用することにどの程度抵抗感があるかを知る」という目的があり、介護保険料の減免制度の利用意向と比較してみました。（図表1・図表2）調査前の予想通り、「そのような事態を考えたことがない」という回答は生活保護制度の方が介護保険料減免制度を大きく上回り、多くの市民にとって生活保護制度の利用というものは現実味が薄いようです。「気が進まないが受ける」「条件を満たしても受けない」という回答は生活保護制度に関してはもっと多いと予想し

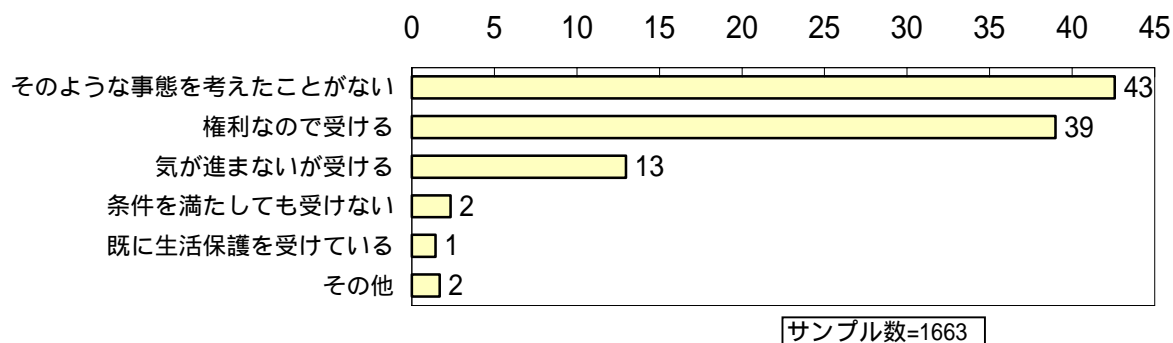
ていましたが、「権利なので受ける」という回答の方が大きく上回り、高齢者にも昔ながらの“お上の世話にはならない”という意識から“権利意識”というものが浸透しつつあるように思われます。

さらに、「気が進まないが受ける」「条件を満たしても受けない」と回答した人にその理由を問うたところ、介護保険料減免に関しては「手続きが難しそうだから」という回答が、生活保護制度については「生活保護を受けるのは恥だと思うから」という回答がそれぞれ最も多くなりました。やはり生活保護制度については“恥”という意識が根強く存在するようです。詳しい調査結果については市政研究所から報告書が出る予定になっていますので、興味を持った人は是非読んで意見を聞かせて下さい。（弘中）

図表1 介護保険料減免制度の利用意向について（％）



図表2 生活保護制度の利用意向について（％）



日本 NPO 学会第 4 回年次大会に参加してきました H13 自主研究経過その 2

「市民活動を促進する条例の類型比較」-地域コミュニティ再生のために-

昨年は京都で開催された日本 NPO 学会第 4 回年次大会が、今年は東京の御茶ノ水にある明治大学で、3月8日(金)から10日(日)の3日間にわたって開催されました。この日本 NPO 学会は、NPO など民間非営利セクターに関する分野の研究者や実務家の研究・教育の交流や情報発信を行なう場として1998年8月に設立され、以来4年足らずの間に会員数1,100名を越す成長を遂げている学会です。新しい公共サービスの担い手として NPO への期待が高まる中、市政研究所としても平成13年度から学会に加入し、継続的に NPO に関する情報収集、調査研究及び発信を行なっていくと考えています。

初日の8日はまずホテルに荷物を預けて、会場である明治大学リパティホールへ向かったが、建物を見てまず圧倒された。地上23階建ての高層ビルが大学なのである(どれぐらいの建物かは、明治大学 HP のトップページ(<http://www.meiji.ac.jp/>)を参考に)。最上階23階にある記念ホールは天井がドーム型の吹き抜けになっており、さながらヨーロッパの宮殿のようである。余談はさておき本題であるが、午前中は「NPO と自治体の協働」というパネルに参加した。パネラーとして池田市の倉田市長や NPO 法人「北摂こども文化協会」の立石さんなどが参加しており、池田市立水月児童文化センターの北摂こども文化協会への運営委託の事例を報告されていた。池田市長は NPO に委託をすることによって、費用が1/2、地域住民の満足が2倍、あわせて4倍の効果があつたと力説されていた。また、再雇用嘱託で水月文化センターに勤務していた元土木部長が、

NPO 委託後に引き続き NPO の職員としてセンターに残り、「ドクターQのおもちゃ病院」の院長としてそれまでと打って変わって嬉々として勤務しているという話などもされていた。NPO 側としては、委託事業による収入で職員に給料が出せることは魅力であるが、自らの活動を委託事業の方向に合わせることは、NPO のミッション、独立性の面で危険性が伴うことも指摘された。

2日目の午前中には「マネジメント」と題したセッションに参加、コミュニティ・シンクタンク「評価みえ」の粉川氏による NPO 組織評価システムの発表は、市政研究所組織の自己評価の参考に、また、(株)ネイチャースケープの中川芳江氏による地域環境保全活動においてより多くの人々の関与を自発的、自立的、自己増殖的に生み出すための戦略的モデルの発表は、地域の諸問題を解決するための協働のステップ・しくみづくりにも大いに参考になるものと思われた。

3日目は、「まちづくり・コミュニティビジネス」、「地域通貨：これまでの経緯と最近の動向」などのセッションに参加、兵庫県コミュニティビジネス開発の現状と課題、早稲田創業支援機構を事例としての NPO によるコミュニティビジネス支援と地域活性化についての報告、地域通貨については千葉の「ピーナツ」、滋賀の「おうみ」などの取り組みの報告を聞き、議論を通じて理解を深めた。(太原)

新築マンション住民のごみに対する意識 H13 自主研究経過その 3

廃棄物に関する意識・行動調査(2)-ライフスタイルの視点から-

土曜・日曜に配達される朝刊には大量のチラシが折りこまれます。中でも新築マンションのものは大判の紙にフルカラーで印刷され、ひととき豪華です。豊中市内の物件も多く、あちこちでマンションが建設されています。

前号で述べた、集合住宅の管理人とごみに関する意識・行動の関係を探るアンケート調査の経過報告

です。平成12~13年に完成した集合住宅を、ワンルーム・ファミリータイプ、各5棟ずつ極力偏りのないように選び、299世帯に調査票を送付しました。回収率は29%にとどまりました。回答者は管理人を概ね好意的に評価しています。また、管理人がいる集合住宅の住民の方がごみ出しの際、近所の目を気にする傾向にあります。(次ページに続く)

昨年度実施した無作為抽出の調査結果と比較すると回答者の年齢層が若く、40歳未満の回答者が68%います（昨年度調査は24%）。近所との関係はより希薄で、近所の人「顔も知らない」「顔を知っているだけ」が24%（昨年度調査は8%）を占め、「ごみに関する相談相手」で最も多いのが「管理人」「市役所」の各25%（昨年度調査は「近所の人」の35%）となっています。ごみに対する意識では、「自分の出したごみを人に知られたくない」「ごみを分別しないと近所の目が気になる」で「非常にそう思う」「ややそう思う」とした回答者の割合がやや大きくなり、「資源を浪費しない質素な暮らしをしたい」「ごみを減らせば埋立地が長持ちする」でやや小さ

くなりました。ごみ減量・リサイクル行動では、過剰包装の辞退、詰替え式商品・再生品の購入、リサイクルなど全ての設問項目で昨年度調査の回答者よりよく実行している結果となりました。

「近所づきあいは希薄、プライバシーを尊重、ごみ減量・リサイクル行動を比較的良好に実行する」傾向のある若い世代の住民に対しては、個人として判断し、行動することのできる情報を掲載したガイドブックが必要だと考えています。「細かな分別の仕方が分からない」との声を耳にしますが、一問一答形式ではなく、ごみ処理の流れから分別方法を判断できるようなガイドブックがあれば、悩むことも少なくなるのではないのでしょうか。（村上）

TOOL BOX（第三回）フロー図

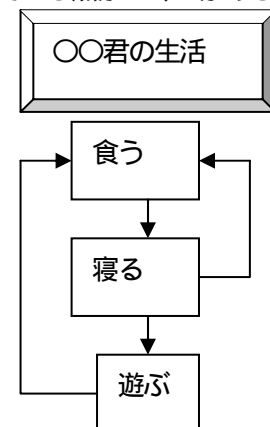
とよなか国際交流協会の榎井さんから「平尾さん × でよろしく」とメールが届いた。同協会の調査研究事業「活動と社会参加をつなぐボランティアリーダートレーニングコース」が、市民活動課等と共同で取組まれ私も加わっていたが、その報告書づくりでの私の分担部分の連絡である。「× ...」は、私がメモ書きなどのときに や線を引張っている様子を榎井さん流に表現したもので、根は私の漫画好きに始まるのかもしれない。仕事の流れを図にすることが面白くなりだしたのは、30年ほど前、土木部で契約の仕事をしていたころである。

建設三部の係を廃止し契約検査室をつくることになり、その検討作業上、仕事の流れをフローチャート図に表わすことが必要になった。工事決議書～契約～検査～支払い～諸書類の保管までの流れと各セクションでの意思決定の手順を図化したわけである。このごろでは、パソコンの「図形」をクリックすればフローチャートがすぐに出てくるが、昔は手書きだった。

その後、この方法は異動のたびに自分の仕事の流れを見るときに役立った。他にも、新しい仕事を考えたり提案したりする際、現状や問題～外部要因～課題～解決策～新しい仕事のイメージ～効果などの関係を一枚のペーパーで表わそうとした。「分りやすい」という評価もあったが、「なにかしら、ごまかされたみたい」という批判もいただいた。批判の趣旨は、仕事の流れにしる、問題と課題の関係にしる実際の仕事の中では、絶えずもやもやした中で、その都度眼の前にある状況に対して自分の考えをハッキリさせながらぶつかっていくところがあって、フロー図で表わすとマニュアルっぽくなってしまふ。やっぱり、キチッと練られた文章が無いと「分った」とは得心できない、というものだった。まったくその通りで、ガツンとやられた記憶が残っている。

そんな訳で図解をするたびにこの指摘を思い出す。思い出しながら、そういえば、最近の本や報告書にもイメージ図が多くなったがひどい図もある。そんな図にならないよう気を付けている点がいくつかある。

例えば、ある目標イメージと機能や行動イメージが、それぞれ やの中に書かれていて、線や矢印でつなぐ図がある。まず図にタイトルが無いもの、あっても内容に比べて過剰な表現は読み手をだますことになる、 や に「目標」とか「機能」とかを示す見出し的な記述があれば助かるが、無い場合は読み手の判断する力にゆだねることになる、 やの中の記述がちゃんと「目標」とか「機能」に応じた事柄に抑制されていると理屈がスッキリ通る、線や矢印の意味が不明なものはつくり手の気分が伝わるだけだ等々である。線や矢印は特に要注意で、具体化・転換・移行・単なる工程など図の意図を明確にして使われればいいが、あいまいさをごまかすために線をつないだとしか言いようの無いものもある。矢印で表わしたい動きを実現しようとするに伴う壁や痛みが想定された図はその意味で得心させられる。そんな図を書く力を身につけたいものである。（平尾）



データバンク通信より

市政研究所では調査研究を進めるために必要な文献、行政資料等を収集・整理しています。これらの資料を関係者に利用していただくため、雑誌資料目録を毎月作成し“データバンク通信”として関係機関に配布しています。雑誌の特集記事を主に掲載し、受入れ冊数の少ない図書・シンクタンク刊行物については3ヶ月に1度紹介しています。

データバンクの担当となり“データバンク通信”を作るようになった始めの数ヶ月、真っ赤と言ってもいいほどに修正されていた原稿でしたが、1年が過ぎようとしている現在ではようやくショックを受けずに原稿を受け取る事ができるようになりました…。

“データバンク通信”を作成していると、見慣れないカタカナや私にとっては難しい言葉を目にする事が多くあります。新しい事を知る度に自分の知らない事がたくさんあるものだと気づき、自分の知っている事はほんの少しだと視野の狭さを感じますが、視野を広げるには人との交流を広げる事や、本を読む事などが必要だと思います。

“データバンク通信”は先に述べたように雑誌の特集記事の紹介にとどまっていますが、視野を広げるための1つの手段として皆様にも役立てていただければと思います。

まだまだ工夫の必要があると思いますので、ご意見、ご要望がありましたらお聞かせください。(洲浜)

事務局から

サンタクロースに会いたい! 「森と湖の国」フィンランドに行って来ました。今回の旅の目的は、オーロラを見ること、そしてサンタさんに会うことでした。オーロラ遭遇のお話は次の機会に…。

「サンタクロースに会ってみたい!」と、思った事はありませんか?

ロヴァニエミという町の、北緯66度33分、北極線上にとがり屋根にサンタマークのサンタクロース村があります。村内は、オフィス、郵便局、ショップ、レストランなどがあり、オフィスがサンタクロースの部屋になっていて、ここでサンタさんに会うことができます。ここはサンタさんの仕事場で、住んでいる所は村から300kmほど北へ行った、ラップランドのコンバトゥントゥリという山の中だそうです。部屋の中には大きな暖炉があり、壁には大きな本棚と本、すべてがビッグサイズです。長く白いヒゲで赤い洋服に身を包み、大きな椅子に腰掛けたその姿は、まさしくサンタさんです。まずは記念撮影。(2人で30ユーロと少々高め) 友達の“How old are you?”の質問に、“Long long time”の返事。(サンタさんはかなりのご長寿さんの様です)そして、握手。白く透き通ったその手の大きい事にビックリ!思わず“Big!”言った私に、“Two metre”と一言。(サンタさんはとってもデカイ) オフィスの隣りにある郵便局には、世界中の子供達から年間60万通を超える手紙が届けられ、2000年冬国外からの手紙で最も多かったのは、日本からだそうです。



優しい笑顔と大きくて暖かい手、寒いフィンランドでの心暖まるひと時でした。(M)

研究所の一年間 研究所の一年間があっという間に過ぎた。研究所の活動を通して様々な人たちとの新しい出会いがあった。古くから付き合いのあった人たちとの出会い直しも含めて大変化である。せっかくの新しい関係を新しい年度に大事につなげていきたい。研究所が新しく取組んでいこうとしている市民と共に進める研究活動をこうした関係の中で支えていただければと欲張っている。(平尾)

編集長より

多くの方が研究所に対して持っているであろうイメージ「自分らとは関係ないところで小難しい理屈をこねまわしているやつら」というものを少しでも変えようという気持ちでこのニューズレターの編集長を一年間やってきました。編集長の役は今回を最後に辞任に追い込まれそうですが、新年度は公募で選ばれた研究員がおそらく編集長になって充実させていってくれることと思います。乞うご期待!(弘中)

